特集

徳島大学の教養教育

院長からのメッセージ

教養教育院 院長 **宮崎 隆義**（みやざき たかよし）

教養教育はなぜ必要なのか

大学に入学した学生の皆さんは、早く専門の勉強をして自分が目指したものに早く近づきたいと思っていることでしょう。しかし、皆さんが選ばれた「大学」というものは、university、つまり本来、学生と教員とが一体となって自由と自立を重んじ、多様な価値観と偏向しない思考力を身に付けるために作られた場なのです。

昨今は、実用重視、成果重視、スキルをしっかり身につける、そのためのラーニングアウトカム（学習成果）重視の教育が謳われるようになっています。それももちろん重要なことです。しかし、そのためには、十分な基盤や基礎の部分はもちろん、それが社会の中でどのような意味を持つのか考えることも必要です。教養なんてと軽んじる人がいますが、スキルを身につけ、専門を深めるためには、しっかりとした価値観を養い、そのためにも知識や視野を広げなくてはなりません。そこには、柔軟な思考力、豊かな想像力が必要なのです。およそ人と接することがない仕事はないと思いますが、相手の気持ちを察することや、優れたスキルや専門性があっても、それを応用したら結果がどうなるかを想像しなくてはならないでしょう。

ここ20年くらい、教養の必要性ということが世界的に言われています。その根底には、価値観の狭小化、思考の偏向化に対する危機感があります。それは、内向きの傾向と他者を顧みない自己中心主義の蔓延に対する不安なのです。多様な価値観を知ること、そして、国を超え、人種や民族を超え、人間として相手の気持ちを想像すること、そうしたある意味で当たり前のことが重要視されているのです。

教養を身につけることは、言葉では簡単ですが、実は困難なことです。まず自由に学べることの意味をしっかりと考え、生涯のものと捉えなくてはなりません。知らない、わからない、考えたことない、関係ない、など、自分の殻に閉じこもっていてはだめです。いつまでも親に甘えず、社会人として自立することが必要なのです。

教養教育は どうあったらいいのか

大学の本質を考えると、入学した皆さんが持つ潜在的な力を見つけ育てるためには、学生と大学の教員が、入学時から卒業、修了時まで、一体的に協力し合わなければなりません。教養は教養で、専門は専門でという、分担とお任せにはもう限界があります。大学設置基準の大綱化によって一般教育と専門教育との区分が無くなりましたが、皆さんを、大学の教員は入学時から卒業、修了まで、しっかりと指導しなくてはなりません。教員は研究者でもありますから、その研究の面では常に新しい知見や発想を模索しています。深く狭い教育も大切ですが、皆さんの持つ潜在的な可能性を育てるという点では、より広い柔軟な教育も大切でしょう。そうした教育から専門教育への繋がりがあって、思いがけない発想から大きなものが生まれるかもしれません。

大学は、楽をして単位を取り、バイトやクラブ活動をして卒業すればいいという考えではこれからの時代を生きてゆくのは大変です。大学は学ぶところ、自分の可能性を切り開くところだと、皆さんもその家族もそして教員も考え方を変えていかなくてはなりません。

徳島大学は、地方大学として、地域と密着した大学です。徳島には、ご存知のように世界的な企業もあり、関西や首都圏とも時間的にはほぼ等距離にあり便利なところです。物価も安く安全で、留学生も安心して暮らすことのできるところです。その徳島大学で、教養教育に対する意識や考え方を、教員も学生も一緒になって変えていかなくてはなりません。徳島大学が、皆さんの持つ潜在的な可能性を伸ばしてくれる優れた大学であることを、学生も教員も自覚できれば、徳島大学は地方の雄としてさらに発展してゆくことでしょう。

教養教育院は、徳島大学及び各学部等の学位授与の方針（DP）に沿った教養教育の運営及び質保証を担う責任部局として2018年4月に発足しました。

教養教育院ロゴマークについて

ロゴマークとしてパンジーの花を用いました。パンジーの名称は、フランス語の“思う、考える”を意味するパンセに由来します。2008年3月に全学共通教育センターのロゴとして採用され、2016年4月から教養教育院ロゴマークとして継承しました

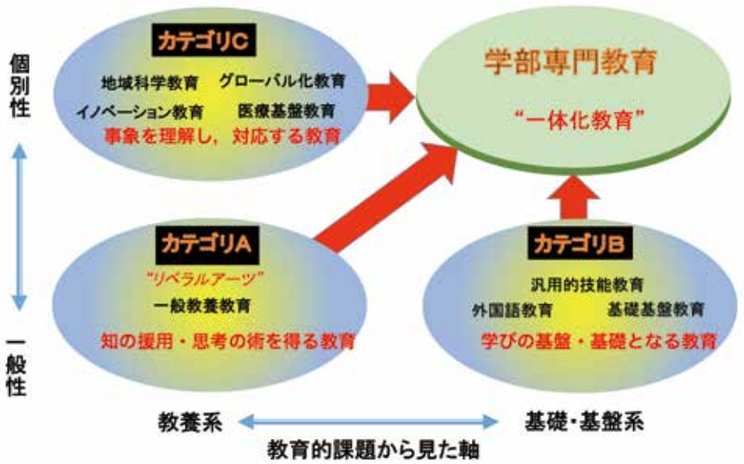
教養教育のカリキュラム概要

カリキュラムについて

徳島大学では2016年に教育の見直しがあり、学部の新設・再編とともに教養教育の責任部局として教養教育院が立ち上げられました。立ち上げに際して、徳島大学で教養を学ぶことの理念を多くの人と議論し、以下のことを確認しました。

徳島大学における教養教育は、幅広い学問領域を学ぶことを通じて、広い視野を持ち、俯瞰的に物事を捉え、高い倫理性に裏打ちされた人間性に富む人格の形成を促すとともに、自律して未来社会の諸問題に立ち向かう「進取の気風」を身につけ、「持続可能な社会づくり」を担うための学問的基盤を形成することを理念としています。

この崇高な理念をどのように授業の中に反映させたらよいでしょうか。教養教育院としては以下に述べる2つの方法を取り入れることとしました。



1. ESD

上記の理念に「持続可能な社会づくり」という言葉があります。このための教育はESD(Education for Sustainable Development)と呼ばれていて、「持続可能な開発のための教育」と訳されています。今、世界には環境、貧困、人権、平和、開発といった様々な問題があります。ESDとは、これらの現代社会の課題を自らの問題として捉え、身近なところから取り組む（think globally, act locally）ことにより、それらの課題の解決につながる新たな価値観や行動を生み出すこと、そしてそれによって持続可能な社会を創造していくことを目指す学習や活動です。教養教育ではこの学習を目指し、全ての授業においてESDの観点を導入するようにしています。これに関連して最近、SDGs(Sustainable Development Goals)「持続可能な開発目標」という言葉も用いられています。これは2015年9月の国連サミットにおいて全会一致で採択されました。「誰一人取り残さない」持続可能で多様性と包摂性のある社会の実現のため、2030年を年限とする17の国際目標が掲げられています。こうした現代社会の課題を知り、どうしたら解決できるのかを考えるきっかけとして、教養教育を位置づけています。

2. 8つの科目群

徳島大学では、幅広い学問領域の中に数学、物理学、哲学、歴史といった普遍的な価値を学ぶ授業があるとともに、社会の課題に向き合い課題解決を考える授業も数多くあります。そこで教養教育の再編においては、①普遍的な学問の価値を学ぶ「一般教養科目群」、②専門教育の学びの基礎・基盤となる「基礎基盤教育科目群」、「外国語教育科目群」、「汎用的技能教育科目群」の科目群に加え、③現代社会の課題を学ぶ「グローバル化教育科目群」、「イノベーション教育科目群」、「地域科学教育科目群」、「医療基盤教育科目群」を新設しました。これらの多様な科目を学ぶことで、学部の専門教育と連携・一体化する教育を目指しています。

教養教育は他学部の学生と学ぶことのできる機会ともなっています。学部の専門に繋がる内容に関する課題を、他学部の学生とも議論し、自分の意見をつくっていく場になることを願っています。

特色ある取組について

語学マイレージ・プログラム

グローバルということが声高に言われている今、鍵となるのは語学力です。徳島大学では、2018年度から、学部教育において一貫した語学教育体制を構築し、学生の目標・目的にあった語学力、コミュニケーション力・自己主導型学修力を養うことにより、十分な語学運用能力を持つ人材を育成することを目的とする「語学マイレージ・プログラム」を導入しました。

社会で求められている人材の資質は、語学、教養、専門、の3つだと言われています。もちろんもっと多様な資質も備わっていたほうがいいですが、語学力は、や

はり身につけておいたほうがいいでしょう。長年英語の勉強をしたのに身についていないと批判的なことが言われますが、語学は、勉強というよりも、日々の練習、継続と積み重ねです。もちろん語学を勉強するということには、その言語が担っている文化を知ること、その言語を使っている人たちの考え方を知るという、大きな意味があります。そのことを念頭に置きながら、使える様になることも考えなければなりません。

「語学マイレージ・プログラム」は、ゲーム感覚を取り入れたものです。英語を例にとれば、教養の英語関係の授業の評点がまずポイント化されます。それに、それぞれ所属学部の専門教育での英語関係の授業の評点が加わっていきます。さらに、TOEICやTOEFLのスコアが加算され、いろんな英語関係のプログラムに参加すると、それに応じたポイントも加算されます。

基本は、日々の勉強と練習をきちんと継続して、積み重ねていけばポイントが自然に増えていくというものです。習得したポイントが700ポイント以上ないと卒業できませんが、ごく普通に学習していれば、不安になることはありません。ポイントを多く貯めると、学部長表彰、学長表彰もあって、証明書も発行され、就職活動にも有効に利用できます。

10年以上も英語を勉強していながら使えない、身についていないという人がいますが、本当にしっかり勉強し練習して身に付けた人はそんなことは言いません。学生時代に、ラジオ講座を毎日、朝昼晩と3回聞いてひたすら練習して覚え、発音を口に出して真似て、ネイティヴ並みの力を付けていた友人がいました。留学などはしていませんでしたが、外国人教員も驚くような英会話力でした。その友人の専門は経済関係でしたが、彼の悩みは、文献を読みこなすことと英語で文章を書く力が弱いということでした。それを自覚して、懸命に辞書をぼろぼろになるまで引きまくっていました。日常的に英語を使う場面がまずあり得ない日本の生活の中で、練習も何もせずに、週1、2回の英語の授業を受けたのに身につかないと言うこと自体おかしなことなのです。スポーツや楽器の毎日の基礎練習と同じなのです。地道に毎日、短時間でも練習をすること、しかも途切れることなく継続して練習をすることを語学マイレージ・プログラムに託しています。このプログラムを利用し、学習環境に恵まれた中で、世界に飛び立てる語学力をぜひ身に付けてください。

語学教育センターのワークショップの様子

特色ある授業について

グローバル化教育科目

留学留学生対象の「日本事情」と日本人学生のグローバル科目の合同授業を紹介します。前期は「日本事情Ⅰ」と「異文化交流から学ぶグローバル化」、後期は「日本事情Ⅱ」と「異文化体験から何を学ぶのか」の二つです。担当教員が互いに協働し一つの授業として、①日本人学生・留学生そして学びのコミュニティーの社会人の三者が協力する。②身体と声を駆使して短いパフォーマンス（ミニドラマ等）をグループで上演する。③三者のそれぞれの学びと気付きを大切にし、体験を振り返る。の三つを柱に組み立てています。

例えば2018年には、地域創生センター（2019年から人と地域共創センターに組織替え）と連携して専門家の指導のもとに人形浄瑠璃にチャレンジしました。人形の操作を学び、自分たちで新たな作品を創作し上演することができました。また2019年は市立図書館の司書によるアニマシオン（話し手と聞き手が絵本を演じて楽しむ読み聞かせの手法）の体験を活かして、最後にそれぞれの「生きるとは何か」をテーマにしたミニドラマの作成と上演を試みました。いずれも「息を合わせる」大切さに気付かされました。そして毎期末に留学生は「日本人への提言」のスピーチを行います。これは、留学生が日本で不思議に思ったことを日本人学生が聞き取って互いに考えることから始め、価値観の違いに気付きこれから何が必要なのかを互いに探り、提言にします。

授業を通して留学生は日本語と日本文化を、日本人学生にはこれからの多文化共生者社会で生きるためのヒントを体験から学ぶことを目標としています。

イノベーション教育科目

イノベーション教育科目は「さまざまな領域における創造的思考と，それを実現するための『ものづくり・ことづくり』や『協働推進・プロジェクト推進』のための技法を学ぶ」ことを目的とし、2016年の教養教育院設置時に新設された科目です。共通教育時代の「共創型学習」内の関連題目を受け継ぎつつ、イノベーションを「新しいものごとを創出し、それを社会に実装することで社会そのものを変革すること」と定義し、それを実現するための考え方や方法論について、グループワークを積極的に活用した教育活動を展開しています。イノベーションプラザ（高等教育研究センター学習支援部門創新教育推進班）が実施する学生のプロジェクト活動である「イノベーションプロジェクト入門」、デザイン思考を用いた課題解決プログラム「イノベーションチャレンジクラブ」や、産業院が実施する国内外のビジネスシーンで活躍する産業院客員教員と対話する「起業を知ろう」、大学祭の模擬店を通じてベンチャービジネスを体験する「次世代事業創造実践」など、従来の枠に捕らわれない様々な授業題目を受講者それぞれの興味に応じて選択できるのも魅力です。

ウェルネス総合演習

ウェルネス総合演習は人間の心身の健全さ（ウェルネス）について、人体そのもののしくみとそれにより実践される様々なスポーツ、そしてそれを取り巻く社会環境という多様な視点から講義と実習とを有機的に連結させて学ぶ科目です。実習ではサッカー、ソフトボールやバトミントンといった一般的なものから、フリスビーを競技化したスポーツであるアルティメットや太極拳、近年オリンピック競技となり注目されているスポーツクライミングなど、様々なスポーツを対象としています。

地域科学教育科目

地域問題を、自らの課題として受け止められる公共の精神と、地域における組織人として必要な資質を得ることを目指して、地域創生、地域貢献の意義などの体験的学習も含めて学ぶ科目です。教室で学ぶ座学に加え、以下のように多彩な活動が授業に組み込まれています。

- ボランティア・パスポート入門：実際に地域のボランティア活動に参加することを通して、地域の課題を体験的に学ぶ授業。
- 実践力養成型インターンシップⅠ・Ⅱ：県内の企業・団体が抱える課題に対して、受入先と学生が中・長期にわたり協働してミッション達成を目指すインターンシップ授業。
- 実践まなぼうさい：防災リーダーとして防災活動を行える人材を育成する授業。グループワークの方法、災害ボランティアとしての心得を学習するとともに、被災者の心理や避難支援方法を実践的に学ぶ授業。
- 埋もれた文化遺産Ⅰ・Ⅱ：大学近辺の遺跡を散策したり、考古資料を製作することによって古代人の実生活を体験ことを通し、古代人と現代社会を相対化する授業。
- とくしまの環境を学ぼう：徳島県職員やNPO団体、ジャーナリストなどが講師として参加するとともに、見学・ボランティア活動などを通して、環境問題解決の議論を行う授業。